

平成28年度芝古墳発掘調査 現地説明会資料

1 はじめに

- ・この調査は、乙訓古墳群の国史跡指定に向けた主要古墳の実態解明を目的として実施しています。
- ・この古墳は、京都市西京区大原野石見町632-3に所在する古墳時代後期の前方後円墳です。
- ・調査期間は、平成29年1月16日から3月上旬まで、面積は約160㎡の予定です。
- ・調査は、平成28年度国庫補助事業として実施しており、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が担当しました。

2 古墳の概要

- ・形態と時期 古墳時代後期の前方後円墳
- ・規模 全長38m以上、墳丘長32.7m、後円部の直径約23m、前方部長約12m、後円部高約3.6m、前方部高約3.4m
- ・主体部 横穴式石室（右片袖式）
- ・外表施設 段築：△（後円部のみ2段か）、葺石：×、埴輪：○、周溝：○（全周せず）
- ・埴輪 円筒埴輪（4条突帯5段）・朝顔形円筒埴輪ともに穴窯焼成
- ・その他 後円部の中央から外側に向かってのびる石組み溝を2基確認。



図1 芝古墳の位置図

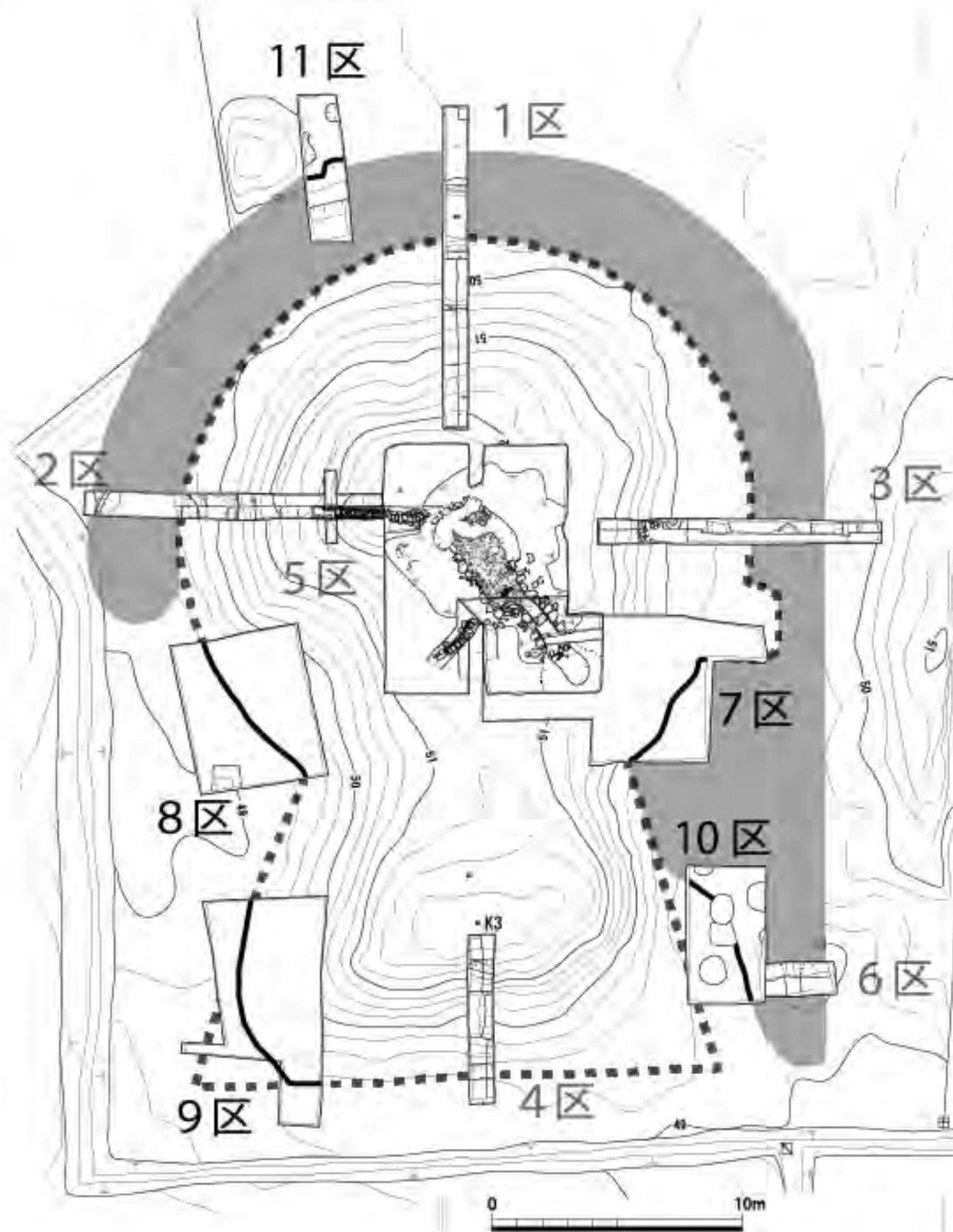


図2 芝古墳の墳丘と調査区

3 芝古墳群について

桂川右岸域の乙訓と呼ばれる地域には多くの古墳が分布しており、全国的にも著名です。これまでに約400基の古墳が確認されていますが、そのうち墳形や規模、外表施設の有無、埋葬施設の種類などから首長墓（有力者の墓）と考えられる古墳は37基存在します。芝古墳は、古墳時代後期に造られた前方後円墳であり、乙訓地域の首長墓の1基です。しかしながら、本格的な調査は実施されておらず位置付けが不明確であったことから、京都市は平成25年より測量・発掘調査を継続的に実施しています。

そもそも芝古墳は芝古墳群に属する1基であり、芝1号墳とも呼ばれています。芝古墳群は、桂川の支流である小畑川によって形成された標高50mほどの低位段丘上に立地しています。現在の京都市西京区大原野石見町から長岡京市井ノ内頭本・向井芝、今里口山にかけて分布しており、前方後円墳1基、円墳12基、方墳1基の計14基の古墳で構成されます。しかし、この芝古墳の周辺は筍の生産が活発であり、その土取りのために消滅した古墳も少なくないと思われまます。事実、芝14号墳は大正7年に土取りにより破壊されています。また、近辺で古墳が確認されていない時期の遺物なども確認されていることから、この一帯に存在した古墳の数が増える可能性は高いと考えられます。

さて、芝古墳群でこれまで実施された調査はそれほど多くありません。昭和42年に京都府教育委員会によって分布調査が行われて以降は、平成25年度に京都市が芝古墳の測量調査を実施するまで手付かずの状況でした。京都市の調査以前における芝古墳群の情報をまとめると以下ようになります。

まず、芝古墳群で時期がある程度判明している古墳は2基存在します。出土した遺物等から、12号墳が7世紀前半、14号墳が6世紀中ごろに位置づけられます。この他には、4号墳と10号墳が木棺直葬と想定されている程度に過ぎません。芝古墳に関しては更に情報が少なく、測量図から全長32m程度の前方後円墳であることが知られるのみで、埋葬施設・外表施設・築造時期など情報はなく、これまで研究者によって異なる見解が示されてきました。特に築造時期に関しては5世紀前葉から6世紀後葉と長い時期幅で考えられていました。

今調査は、すべての調査を含めると第5次調査、発掘調査に限れば第3次調査となります。

4 各調査区の状況

今回の調査では、5ヶ所の調査区を設けました。以下、通し番号で7～11区と呼称して、各調査区の成果に触れます。なお、1～4区は平成26年度、5・6区は平成27年度に調査を実施した調査区です。

【7区】

この調査区は、東くびれ部に位置します。5区と一部重複しており、横穴式石室羨道部の様相と墳丘の遺存状況の確認を目的としました。

調査の結果、近世墓により部分的に古墳が破壊されていましたが、後円部東南部からくびれ部かけての地山を削り出して成形した墳丘裾を確認することが出来ました。また、調査区北部では、墳丘裾が東に向かって屈曲することから、この付近に造出が存在した可能性があります。

【8区】

この調査区は、西くびれ部に位置します。造出の有無と墳丘の遺存状況の確認を目的としました。

調査の結果、7区と同じく地山を削り出して成形した墳丘裾を確認することが出来ました。また、西くびれ部には造出が存在しないことも明らかになりました。なお、芝古墳の後円部で墳丘裾を確認できたのは7・8区がはじめてです。

【9区】

この調査区は、前方部南西隅の様相の確認を目的としました。

調査の結果、部分的に地山を削り出して成形した墳丘裾を確認する事が出来ました。しかし、墳丘裾が浅い場所に遺存していたために竹根の影響を著しく受け、古墳が損なわれていることが判明しました。

【10区】

これまでの調査により、墳丘の東側は削平を受けている事が判明していたため、周溝などの古墳に伴う遺構の確認を目的としました。

調査の結果、調査区東半で周溝の可能性のある落込みを確認しました。この落込みの深さは5～30cmほどしかなく、南に向かって次第に浅くなります。埋土中の遺物は少なく、埴輪と須恵器が出土したのみです。

【11区】

この調査区は、後円部北西に存在する小丘状の高まりの性格の解明と古墳の周溝の確認を目的としました。

調査の結果、周溝の北肩口と思われる落込みを確認しました。また、小丘の中央付近で、一辺1.5mほどで深さ20cmほどの土坑を確認しました。この土坑の中から、3枚の土師器皿が重ねられた状態で出土しています。従って、この小丘状の高まりは後世の所産であることが明らかとなりました。

4 まとめ 今回の調査で分かったこと

今調査では、墳丘の周辺に調査区を設け、形状や外表施設の有無の確認を目的に調査を実施しました。調査の結果、複数の調査区で墳丘裾の位置をおさえることができ、墳丘の形状を復元するための上で重要な情報を得ることが出来ました。この成果により、後円部（直径23m）やくびれ部幅（13m）の規模、前方部の開き方が想定よりも大きいことが明らかとなりました。

また、現時点で断定はできませんが、後円部東側に突出部が存在する可能性が出てきた点も注目されます。芝古墳に後続する首長墓とみられる井ノ内車塚古墳では、これまでの調査で後円部の西側に造出と多様な形象埴輪が確認されています。しかし、芝古墳では西側では造出は確認できず、逆方向の東側で造出の付くの可能性が出てきました。また、芝古墳では普通円筒埴輪と朝顔形埴輪のみしか認められない点も注目されます。

まだまだ不確定な点も残されていますが、これまでの一連の調査で芝古墳の全体像が明らかになりつつあります。これらの成果を、井ノ内車塚古墳・井ノ内稲荷塚古墳、そして更に広い範囲の中で比較・検討することでより鮮明な歴史を復元できるかもしれません。

▽11区全景(南東)



▽7区全景(北東)



▽8区全景(南西)



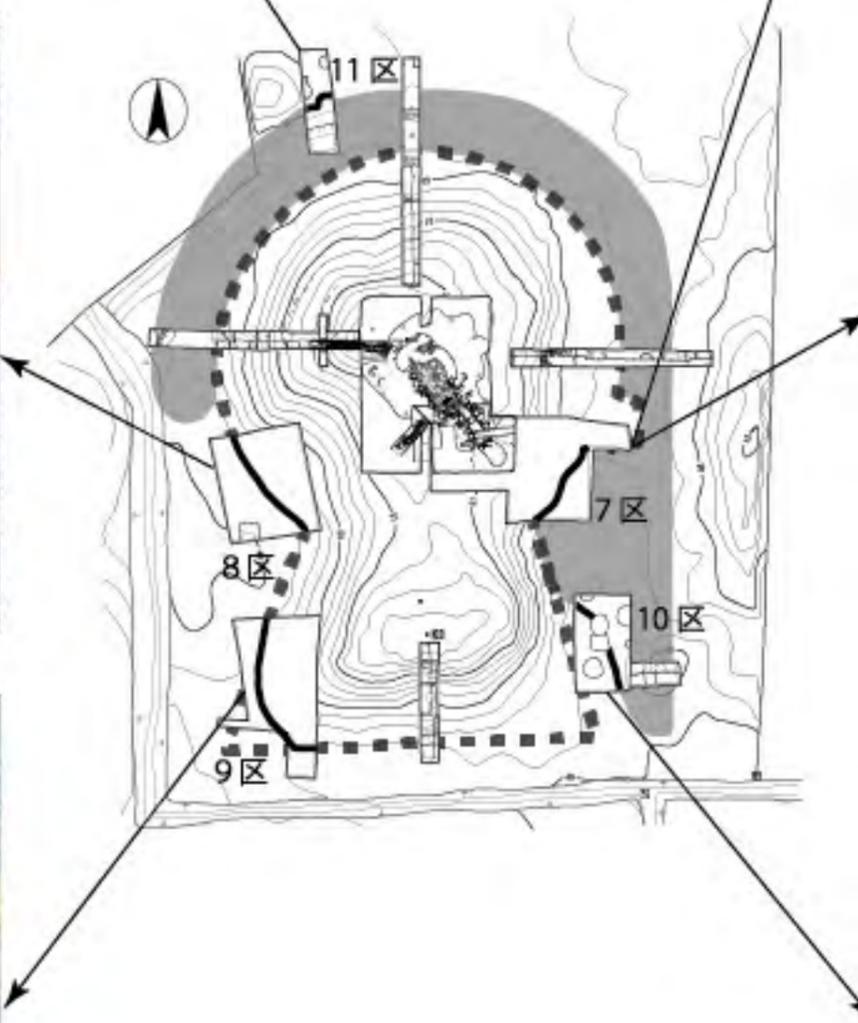
▽7区くびれ部(南東)



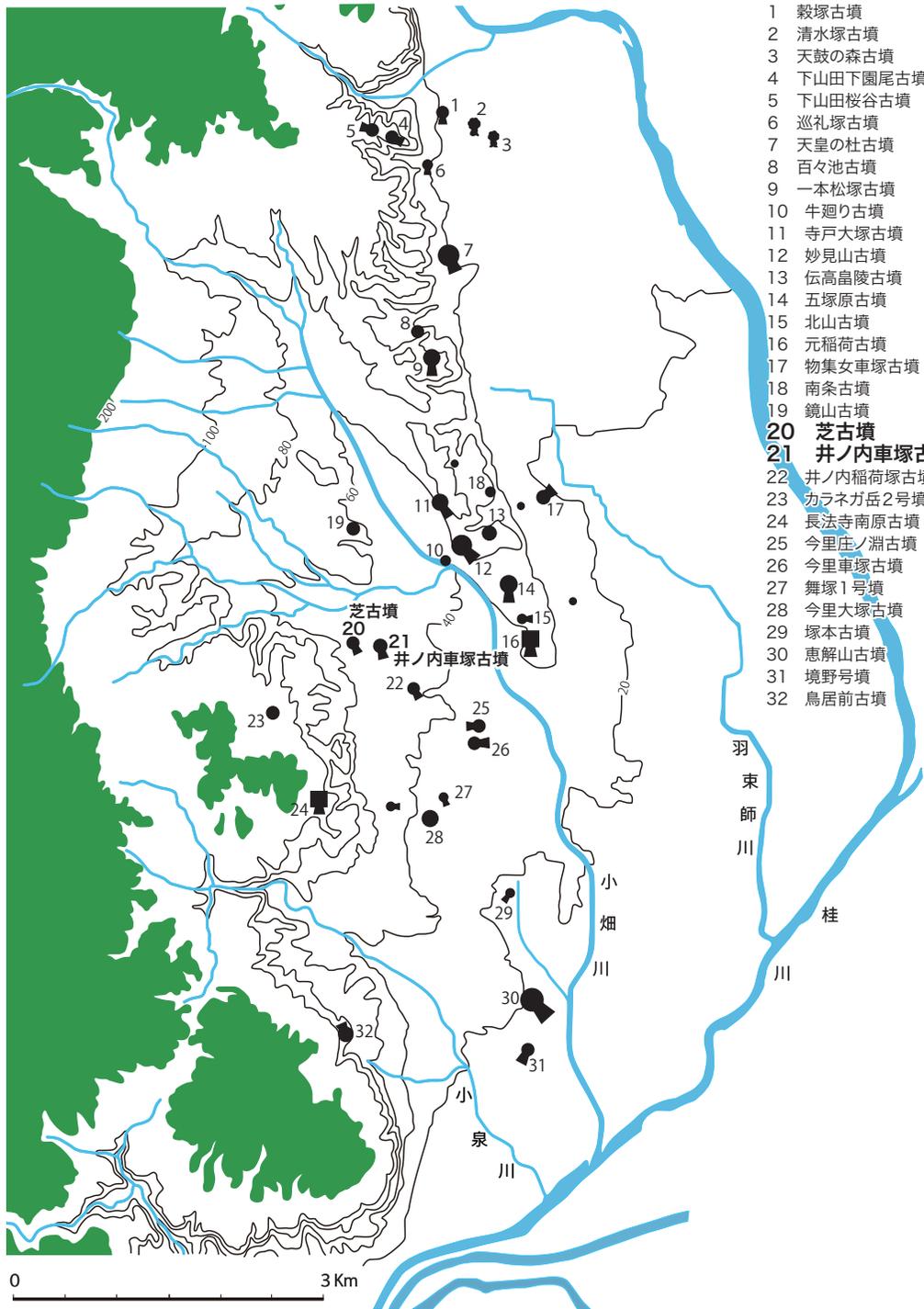
▽9区全景(北東)



▽10区全景(北西)



乙訓古墳群の分布と編年



- 1 穀塚古墳
- 2 清水塚古墳
- 3 天鼓の森古墳
- 4 下山田下園尾古墳
- 5 下山田桜谷古墳
- 6 巡礼塚古墳
- 7 天皇の杜古墳
- 8 百々池古墳
- 9 一本松塚古墳
- 10 牛廻り古墳
- 11 寺戸大塚古墳
- 12 妙見山古墳
- 13 伝高畠古墳
- 14 五塚原古墳
- 15 北山古墳
- 16 元稲荷古墳
- 17 物集女車塚古墳
- 18 南条古墳
- 19 鏡山古墳
- 20 芝古墳**
- 21 井ノ内車塚古墳**
- 22 井ノ内稲荷塚古墳
- 23 カラネガ岳2号墳
- 24 長法寺南原古墳
- 25 今里庄ノ淵古墳
- 26 今里車塚古墳
- 27 舞塚1号墳
- 28 今里大塚古墳
- 29 塚本古墳
- 30 恵解山古墳
- 31 境野号墳
- 32 鳥居前古墳

		葛野	向日丘陵	長岡	大山崎
前期	1期		● 五塚原 ■ 元稲荷		
	2期	● 一本松塚	● 寺戸大塚 ● 北山		
	3期	● 百々池	● 妙見山	■ 長法寺南原	● 境野
	4期	● 天皇の杜	● 伝高畠	■ 今里車塚	
中期	5期	● 鏡山	● 牛廻り	● カラネガ岳2 ■ 今里庄ノ淵 ■ 恵解山	● 鳥居前
	6期				
	7期	● 下山田桜谷 ● 巡礼塚	● 南条		
	8期	● 下山田下園尾 ● 穀塚		● 舞塚 ● 塚本	
後期	9期	● 清水塚	● 物集女車塚	● 芝古墳 ● 井ノ内車塚古墳 ● 井ノ内稲荷塚	
	10期	● 天鼓森			
終末期	■ 櫻原廃寺	■ 宝菩提院廃寺	● 今里大塚 ■ 乙訓寺廃寺	■ 山崎廃寺	